

はじめに

一般に「倭国から日本国へ」のテーマは国名の変更とされ、その時期が議論されてきた。唐が日本国を認めたのが702年だが[1]、国内では飛鳥浄御原令とする見解が有力とされ、それ以前の「日本」と出現する史料が「誤り」「潤色」とされることが多い。史料が十分評価されていないかに見える。[2]

ここでは、唐使郭務悰の来訪記事と関連する諸史料から、その経緯を再検討した。対象とする文献は『日本書紀』天智紀、『善隣国宝記』「海外国記」「菅原在良勘文」などの国内史料、及び『三国史記』新羅本紀などである。史料の記すところをそれ自体として率直にとらえ、他の史料との関連を探るという実証の方法を貫いた。すると、白村江の戦いの敗戦後、「筑紫都督府」とは別に、近江朝は670年に新羅に「日本」への国名変更を伝える。一方で、唐が派遣した郭務悰は、671年に近江朝には「日本国天皇」と宛て、672年には筑紫の「倭王」に宛てた国書を用意した。敗戦後の過渡期に二つの政権が並立した痕跡であった。史料には「誤り」といえるものはなく、すべて相互に補完し、鮮明な史実を描くものだった。

本論では『日本書紀』における近江、飛鳥、難波などの地を一括し「ヤマト」と表記し、「筑紫都督府・筑紫大宰府」の「筑紫」と、その場所に注目し対比する。

1. 郭務悰の来訪した場所は筑紫

『日本書紀』によれば、天智二年(663)年八月に、白村江の戦いで唐・新羅に敗れ、その一年後から唐は四度にわたり郭務悰らを遣わしたとある。倭国敗戦後の外交交渉とみられるが、交渉の内実は明らかではない。それぞれ三～七カ月に及ぶ長期の滞在であったが、その場所がどこであったのかを考えてみたい。『日本書紀』は以下の来訪を記録している。[3]

第一回 天智三年(664)五月～十二月(約七か月)

第二回 天智四年(665)九月～十二月(約三か月)

第三回 天智八年(669)是歳(入・出国は不明)

第四回 天智十年(671)十一月～天武元年(672)五月(約六か月)

いずれも郭務悰等の滞在所は明記されないが、それを示唆するのは、第二回の記述である。

(天智四年665)九月庚午朔壬辰(23日)、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱国劉德高等を遣す。等と謂うは、右戎衛郎将上柱国百濟祢軍・朝散大夫柱国郭務悰、凡て二百五十四人。七月廿八日、対馬に至る、九月廿日、筑紫に至る。廿二日、表函を進^{たて}まつ。冬十月己亥朔己酉(11日)、菟道に大閱す。十一月己巳朔辛巳(13日)、劉德高等に饗賜す。十二月戊戌朔辛亥(14日)、物を劉德高等に賜う。是月に、劉德高等罷り帰る。

七月二十八日に対馬、九月二十日に筑紫に到着したとする行程が、小書双行で記述される。筑紫到着の二日後、二十二日には表函を進上している。つまり、海路筑紫に

到着すると直ちに上表しているのので、目的の場所は筑紫とみられる。

また、第四回目も筑紫滞在が明らかだ。

(天武)元年(672)春三月壬辰朔己酉(18日)、内小七位阿曇連稻敷を筑紫に遣して、天皇の喪を郭務悰等に告げしむ。是に、郭務悰等、威^{みな}喪服を着て三遍挙哀す。東を向いて稽首す。壬子(21日)、郭務悰等、再拝して書函と信物を進る。

阿曇連稻敷が近江京から筑紫に遣わされていること、郭務悰は亡くなった天智天皇に対して東を向いて哀悼していること、その上、筑紫の王に再拝して国書を進上している。郭務悰の筑紫滞在は明らかだ。第三回目は記録がないが、残る第一回目の天智三年(664)の滞在地を考えたい。この時の経緯を『日本書紀』は以下のように記す。

夏五月戊申朔甲子(17日)、百済鎮将劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣し、表函と献物を進る。(中略)冬十月乙亥朔(1日)、郭務悰等を発て遣す勅を宣^のたまう。是の日、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜う。戊寅(4日)、郭務悰等に饗賜す。(中略)十二月甲戌朔乙酉(12日)郭務悰等罷り帰る。

外交舞台の場所を示唆する記述はないが、『善隣国宝記』天智天皇三年(664)条の「海外国記」の詳細な記述がそれを明かしてくれる。

九月、大山中津守連吉祥・大乙中伊岐史博徳・僧智弁等、筑紫大宰の辞と称し、実は是れ勅旨なり。客等に告ぐ。今客等の来状を見れば、是れは天子の使人に非ず。百済鎮将の私の使いなり。亦復^{また}賚^{もたら}す所の文牒は、執事に送上するの私辞なり。是^{ここ}を以て使人は国に入ることを得ず、書も亦朝廷に上^{たてまつ}らず。故に客等の自事は、略^{ほぼ}言辞を以て奏上するのみ。十二月、博徳、客等に牒書一函を授く。函の上に鎮西將軍と著す。日本鎮西筑紫大將軍、百済国に在る大唐行軍総管に牒す。使人朝散大夫郭務悰等至る。来牒を披覽し、意趣を尋ね省^みるに、既に天子の使に非ず。又天子の書無し。唯だ是れ総管の使、乃ち執事の牒たり。牒は是れ私意なれば、唯すべからく口奏すべし。人は公使に非ざれば、入京せしめず。と云云(此れ亦、師安・広忠・信俊・師遠・広宗五人、同じく勘^{かん}がうる所なり。)[4]

九月には、百済鎮将の私使であるから入国させないとし、十二月にも、入京させなかった。このようにヤマトは唐から派遣された郭務悰等の「入京」を拒否するという、戦勝国に対して高慢で理解し難い対応をとった。このように、郭務悰は四回来訪し、記録のある三回すべて筑紫に留まり、筑紫で表を進上し、長期間の外交交渉にあたったとみられる。

2. 『日本書紀』天智紀の饗宴にはその場所がない

『日本書紀』天智紀では、第一回の三年十月の郭務悰、第二回の四年十一月の劉徳高等、この二回の帰国時に「饗」が催されたとする。しかし、なぜかその場所が記されていない。一般に、『日本書紀』では、海外からの遣使や賓客などが還るときに、慰労のため饗宴を催し、対象者をその場所とともに記録している。「饗○○於□□」とある典型的構文のほか、それに準じて「饗」の対象者・場所が明らかかな場合を含めると39か所ある。(文末の資料1の参照)[5]

ところが、天智紀に限っては蝦夷に対する二回を含め、全四か所に「於□□」がない。はじめから場所のない記録であったのか、さもなければ原史料に存在した場所を削除したか、いずれかが考えられる。すでに「海外国記」でみたように、天智紀の郭務悰、劉徳高らはいずれもヤマトへ「入京」しておらず、筑紫がその外交の舞台であった。饗宴があったとすれば、それは筑紫で行われたであろう。とすれば、『日本書紀』編者が筑紫地名の「於□□」を削除したと考えるのが自然であろう。おそらく、外交の舞台がヤマトであったかのように、印象操作するのが目的だったのだろう。従来、第二回の劉徳高等の「大関于菟道」を以て、一般には劉徳高のヤマト来訪と解釈されている。この「大関」記事は必ずしも遣使関連の記事とはいえない。別記事を挿入して印象操作をしたとも考えられる。[6]

こうして、『日本書紀』は郭務悰等の外交交渉が実際には筑紫で行われたにもかかわらず、あたかも「ヤマト」でなされたかのように編集され、そのように理解されてきた。

3. 白村江の戦いと筑紫都督府

白村江の敗戦後に、唐皇帝の命により熊津都督府から派遣された郭務悰らの外交の舞台は筑紫であった。ではなぜ筑紫だったのだろうか。唐は旧百済領に熊津都督府、新羅に鷄林州都督府を、旧高句麗の首都平壤には地域を統轄する安東都護府を置き、東夷全域の統治をめざした。都督府はいずれも旧王国の中心地に置き、かつての統治体制を利用して唐の支配を実現するものである。その意味で、百済救援・白村江の戦いに敗れた国の中心は筑紫であったとも考えられる。

従来、斉明天皇や中大兄皇子らの戦争指揮が語られてきたが、ヤマトの勢力と白村江の戦いとを積極的に関連づけるものが実在するわけではない。『風土記』逸文の備中国邇磨郷の条は百済救援の戦いに関する貴重な記録を残す。

即ち勝れたる兵二万人を得たまひき。天皇、大く悦ばして、此の邑を名づけて二万の郷と曰ひき。後に改めて邇磨と曰ふ。其の後、天皇、筑紫の行宮に崩りたまひて、終に此の軍を遣らざりき。

この記事は、天智天皇が皇太子で摂政の時、兵士二万人を徴集したが、斉明天皇が崩じたことにより、その二万の兵を派遣しなかったという。その記事の真意は不明だが、天智天皇は派遣しなかったとされ、主導した姿は見えない。

また、敗戦後の帰還兵に畿内出身者の見当たらないことも確認できる。諸史料から百済での戦役後に帰国した人物は 19 名にのぼる。(文末表 2「百済の戦役帰還者一覧表」参照) 名前から推定される出身地は九州・中四国を中心とし、陸奥國、相模國も確認できる。しかし、畿内の人物は確認できない。[7]

以上のように、白村江の戦いはヤマト勢が中心勢力として戦った史料が実在しない。これまで、『日本書紀』の記す斉明・中大兄らの戦争指揮が当然のように論じられてきたが、実は疑念も大きい。白村江の戦いは筑紫を拠点として遂行され、そうであるが故にその敗戦処理にかかわる対唐外交も、もっぱら筑紫において行われたということが推測できる。

4. 『善隣国宝記』「菅原在良勘文」の意味するもの

これまで、筑紫の政治権力とヤマトの政治権力とは、並立していた可能性があることをみた。それを確認できるのが『善隣国宝記』鳥羽院元永元年（1118）条の「菅原在良勘文」である。ここでは、天智天皇十年（671）「大唐帝敬問日本国天皇」と、天武天皇元年（672）「大唐帝敬問倭王」との、二つの宛名の国書が記される。第四回目の郭務悰来訪時に、二つの宛名の国書が進上されたことになる。

此の書旧例に叶うや否や、諸家に命じて之を勘^{かん}がえしむ。四月廿七日、従四位上行式部大輔菅原在良、隋唐以来本朝に献ぜし書の例を勘えて曰く、推古十六年（608）、隋の煬帝文林郎裴世清を遣わし、倭国に使いせしむ。書に曰く、皇帝倭皇に問う、云云、と。天智天皇十年（671）、唐客郭務悰等来聘す。書に曰く、大唐帝敬みて日本国天皇に問う、云云、と。天武天皇元年（672）、郭務悰等来る。大津の館に安置す。客の上書の函に題して曰く、大唐皇帝敬みて倭王に問うの書と。

四回来訪した郭務悰は、一貫して筑紫にあって、近江に「入京」できなかった。この「菅原在良勘文」と併せて考えると、郭務悰を入京させなかったのは近江の「日本国天皇」であり、筑紫には「倭王」がいたことになる。それは郭務悰の「再拝」からも確認できる。『日本書紀』天武元年春三月条は「郭務悰等、再拝して書函と信物を進る。」と記す。『日本書紀』全巻には他に16か所の「再拝」が出現するが、百濟聖明王、「就庭再拝」が各1か所、ほか14か所はすべて「天皇」に対するものであり、「再拝」は国の第一人者に対する拝礼であった。郭務悰が再拝した眼前には「倭王」がいたのではないだろうか。

こうして、一方の筑紫都督府では唐・百濟熊津都督府との占領統治をめぐる外交、他方のヤマトでは日本国の唐に対する対抗的な外交、二つの外交が併存して展開されていた。[8]

5. 『三国史記』新羅本紀文武王十年（670）の「日本」改名の真実性

「日本国天皇」の外交と「倭王」の外交、二つの並立外交をみた。朝鮮半島の歴史書『三国史記』の記事はそれを補強する記事となろう。新羅本紀文武王十年（670）十二月条である。

倭国更めて日本と号す。自ら言う。日出る所に近し。以て名を為す。(A)

これは『日本書紀』天智九年（670）条が対応するのである。

秋九月辛未朔、阿曇連頼垂を新羅に遣す。(B)

近江朝において阿曇連頼垂が新羅に派遣されたのが670年9月のことで、12月に新羅側が「更めて日本と号す」と確認したものとすれば、A・B二つの記事は整合する[9]。670年9月から12月のこの時期、唐・新羅戦争の開戦の火ぶたが切られ、唐と新羅との緊張関係は高まっていた。近江朝は独自に「日本国」を自称し、新羅と対唐政策で気脈を通じていたとみられる。そして、新羅は近江朝の後ろ盾をえて、敢然と対唐戦争に踏み切ったとすれば、近江朝の新羅への遣使派遣と日本国を自称は、670

年9～12月の出来事として、自然な理解ができよう。

しかし、「日本国」を自称したとする『三国史記』文武王十年の記事は、これまで誤りとされてきた。例えば、『三国史記』（平凡社井上秀雄訳注）では以下のような註釈がなされる。

この日本改称の年次は新旧『唐書』の東夷日本伝を誤り伝えた記事である。この記事は咸亨元年（六七〇）の倭国使節来朝記事と長安三年（七〇三）の記事とを混同してこの年のこととしたのである。

通説となっている解釈であるが問題がある。第一に、指摘される『新唐書』咸亨元年「遣使賀平高麗」記事は、『唐会要』や『冊府元龜』巻970によれば、「咸亨元年三月」の記事とされる。670年3月の遣唐使は『日本書紀』天智八年（669）是歳条の河内直鯨と整合すると指摘する論者も多い。[10]つまり、『三国史記』は670年12月、『新唐書』は670年3月なので、月の異なる別のできごとである。第二に、倭国と日本国の二つの外交の性格が異なる点がこれまで見過ごされてきた。前者の「遣使賀平高麗」は唐が高句麗を平定したことを祝賀するもので、郭務悰との外交関係にあった倭国・筑紫都督府の記事であり、3月がふさわしい。他方、後者の「倭国更号日本」は、すでに唐との戦火を交えるに至った新羅と気脈を通ずるもので、そのような近江朝が唐の高句麗平定を祝賀することはなかろう。咸亨元年の二つの記事は時期と性格の異なる別の外交記録であり、『三国史記』文武王十年記事は再評価が求められる。[11]

6. 「筑紫都督府」と「筑紫大宰府」

二つの政治実体を措いたときに、諸史料から臨場感あふれる歴史の事実が再現されるかにみえる。『日本書紀』は天智十年（671）春正月から、新冠位の制定など一般に「近江令」と称される新政治の開始が記録されるのは、こうしたヤマトの自立を背景にしたものではないか。それは「筑紫大宰府」という機関が天智十年に登場し、その性格が従来の「筑紫都督府」と異なることにも見てとれる。

（天智六年667）十一月丁巳朔乙丑、百濟鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱国司馬法聰等を遣わし、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。己巳、司馬法聰等罷り帰る。

近江朝が拒否する「百濟鎮將」の派遣した遣使を受けいれているのが「筑紫都督府」である。近江朝とは対照的な対応である。白村江の戦いに敗北し、唐の羈縻政策を実施する敗戦処理機関の性格がみてとれる。しかし、のちに『日本書紀』に「筑紫大宰府」が登場するときは、すでに唐の占領機関ではない。

（天智十年671）十一月甲午朔癸卯、対馬国司、使を筑紫大宰府に遣わして言う。

「月生ちて二日、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐、四人、唐従り来たりて曰く、『唐国の使人郭務悰等六百人・送使沙宅孫登等一千四百人、總合べて二千人、四十七隻に乗船して、俱に比智嶋に泊りて、相い謂いて曰く、今吾輩が人船、数衆し、忽然と彼に到らば、恐らく彼の防人、驚駭して射戦はむ』と。乃ち道久等を遣わし、預め稍に来朝の意を披き陳さしむ。』と。

唐の使人郭務悰の率いる船47隻・総勢2000人が対馬に近づくにあたり、対馬側

の攻撃を恐れ、四人が予め「来朝の意」をのべたことを、対馬国司は「筑紫大宰府」に伝えたという。来朝目的と 2000 人の構成に関して議論はあるが、このように 671 年時点では、唐の大船団は「筑紫大宰府」から攻撃を受けることを危惧したのであった。唐の占領機関ではありえない「攻撃への危惧」、新名称の「筑紫大宰府」、「筑紫」には 667 年と 671 年の間に大きな転換があったのではないか。

白村江の戦いに敗れた後、占領下の筑紫から独立して「日本国」を名のったヤマトは、唐への対応においても筑紫と対照的なものであった。これまで、ヤマトの支配下にある一地方が筑紫と理解されてきた。しかし、以上見てきた史料が描く姿は『旧唐書』日本国伝にみる「日本国は倭国の別種」「日本は旧小国、倭国の地を併す」という記述の現実性を示すものであり、従来解釈の問題を浮き彫りにした。

7. まとめ

郭務悰の四回の来訪は筑紫であった。『日本書紀』は来訪場所・筑紫を隠蔽し、印象操作しようとしており、従来場所は軽視されてきた。筑紫都督府がかつての倭国の中心地であり、それゆえ目的地であったと考える。

これは「菅原在良勘文」により 671 年「日本国天皇」、672 年「倭王」とあるのも事実の反映であり、『三国史記』文武王十年の「日本」もヤマトの建国宣言であった。『日本書紀』の天智六年（667）「筑紫都督府」、天智十年（671）「筑紫大宰府」の記事からもその転換が確認される。従来、「誤り」とされてきたこれら「日本」に関する諸史料は、相互に関連する信憑性の高い記録であった。

- [1] 増村宏『遣唐使の研究』「遣唐使粟田真人の入唐年次について」（同朋舎出版・昭和 63 年）長安三年（703）の遣唐使は長安二年（702）が正しいとした。
- [2] 吉田孝『日本の誕生』（岩波新書 1997 年）
- [3] 郭務悰の派遣回数のうち、詳細記録のない第三回を重出記事とする説が有力である。（『岩波古典文学大系本』頭注など）ここでは、記録の事実を重視して四回とする。
- [4] 田中健夫編『善隣国宝記』（集英社）の読み下しによる。
- [5] 「饗」は典型文等のほか、一般動詞として用いられる「饗」が 41 か所あるが、集計の対象としなかった。それらを含めると「饗」は合計（39+41）で 90 か所となる。なお、天智紀の四回の饗は内三回が「饗賜」と記される。これも天智紀の饗宴の主体がヤマトでないことを示唆したものと注目したい。
- [6] 岩波日本文学大系本の頭注（下巻 p364）で、菟道を以て「京都府宇治市付近、唐使に示威するための閲兵か。」とする。従来、第二回目の来訪の天智四年九月条に続く冬十月己酉（11）、「大関于菟道」を以て、「大きに菟道に閱けみす」と読み、「唐使に示威するための閲兵か」などと理解し、菟道（宇治）を通過しヤマトに向ったかの解釈がある。以下のその問題を検討したい。まずは「大関于菟道」とは何を意味するのであろう。第一に、「大関」は熟語とみられる。『春秋公羊伝』桓公

六年条「秋八月壬午大閱。大閱者何。簡車徒也。」とあり、「大閱」とは「車徒（兵車と歩卒）を簡^{しら}ぶる」ものであった。文脈から天皇の行為をさしたとみられる。『日本書紀』では、欽明三十年春正月条と天武十三年四月条に、2 か所の「閱」が現れる。「詔」として出現している。天智紀の文章も天皇がここ宇治において、車徒を観ることを伝えるものである。第二に、天皇が宇治で閱兵することが、前後の郭務棕の来訪と関係する記事ではなく、「菟道」に来たという根拠にはならないといえよう。すると、問題はなぜ「大閱于菟道」記事がここに置かれたのか。意図的にヤマトに誘因するための編集とも考えられる。

- [7] 相模国の多勝美麿については、『新撰相模国風土記』により当地津久井郡の「石楯尾神社縁起」に武勇伝が記録されている。郷土史研究家井上肇氏よりご教示いただいた。帰還兵に関する重要史料につき、『新編相模国風土記稿』巻之百十六 村里部 津久井県巻之一該当か所を以下に示し、末尾にも添付する。

「天智天皇癸亥二年夏六月朝兵拔新羅国城沙鼻岐奴江之二城 前に同く、石楯尾神社縁起曰、天智天皇二年当山の人、多勝美麿、武勇の聞へ有に因て、新羅国の軍役を勤む、彼の国に到り、数百の敵陣を破り、多くの敵兵を生擒し、白馬を取て帰国し、叡覧に備へければ、御感の余り、其馬を賜はると云」

- [8] 「菅原在良勘文」については、すでに松田好弘「天智朝の外交について」『立命館文学』（1980年）で、唐に対する姿勢の異なる二つの勢力の存在について言及されている。
- [9] 阿曇連頼垂は、斉明紀三年、四年の是歳条に「西海使小花下阿曇連頼垂」として登場し、百済外交に関わっている。「西海使」という職名、百済が敵のために滅される旨の発言など、新羅に親和的なヤマトの外交官と推察される。
- [10] 池内宏は「月日の詳かでない（天智）八年の簡単なる記事は、其のまゝ承認し難い」とし、「河内鯨の遣唐も何の為めであったかわからぬ」（『満鮮史研究上世第2冊』p210）とした。鈴木靖民は「天智九年（670）三月に唐本国の朝廷に到っているところからみて、八年後半期の出発であったろう」とし、「賀平高麗」の遣唐使が「八年（669）後半期の出発」と推定している（『日本古代国家形成と東アジア』p194 吉川弘文館 2011）。その後も、『日本書紀』天智八年（669）是歳条の河内直鯨の唐派遣が『新唐書』咸亨元年 670（三月）との関係で論じられる。
- [11] 古田武彦『よみがえる卑弥呼』「日本国の創建」（駸々堂 1987）ここで新羅本紀文武王十年記事を「倭国の終焉、日本国・開始」ととらえた。

表1 『日本書紀』における饗宴の客と場所の一覧表

巻・出現数	「饗」の年次及び 対象者・場所	
巻 11 仁徳 (1)	十二年八月	饗高麗客於朝
巻 14 雄略 (1)	十四年夏四月	遂於石上高拔原、饗吳人
巻 19 欽明 (2)	卅一年五月	遣膳臣傾子於越、饗高麗使
	卅一年七月	饗高麗使者於相樂館

卷 22 推古 (4)	十六年秋八月	饗唐客等於朝
	十六年九月	饗客等於難波大郡
	十八年冬十月	饗使人等於朝
	廿三年十一月	饗百濟客〔 〕
卷 23 舒明 (4)	推古三十六年	聚群臣饗於大臣家
	二年八月	饗高麗・百濟客於朝
	七年秋七月	饗百濟客於朝
	十一年冬十一月	饗新羅客於朝
卷 24 皇極 (5)	元年二月 22 日	饗高麗・百濟於難波郡
	元年二月 25 日	饗高麗・百濟客 (上記により場所は明瞭)
	元年七月	饗百濟使人大佐平智積等於朝
	元年冬十月	饗蝦夷於朝
	二年冬十月	饗賜群臣伴造於朝堂庭
卷 26 齊明 (8)	元年秋七月	於難波朝饗北蝦夷九十九人
	二年是歲	高麗百濟新羅並遣使進調、爲張紺幕於此宮地而饗焉
	三年秋七月	作須彌山像於飛鳥寺西、且設盂蘭盆會、暮饗觀貨邏人
	四年夏四月	遂於有間濱、召聚渡嶋蝦夷等、大饗而歸
	四年秋七月	蝦夷二百餘詣闕朝獻、饗賜
	五年三月	甘櫛丘東之川上、造須彌山而饗陸奥与越蝦夷。
	五年三月是月	(蝦夷等) 於一所而大饗賜祿。
	六年夏五月是月	於石上池邊作須彌山、高如廟塔、以饗肅慎卅七人。
卷 27 天智 (4)	三年冬十月	饗賜郭務悰等〔 〕
	四年冬十月	饗賜劉德高等〔 〕
	七年秋七月	饗蝦夷〔 〕又命舍人等爲宴於所々
	十年八月	饗賜蝦夷〔 〕
卷 28 天武上 1	元年冬十一月	饗新羅客金押實等於筑紫
卷 29 天武下 (17)	二年閏六月	饗貴干宝等於筑紫
	二年九月	饗金承元等於難波
	二年冬十一月	饗高麗邯子・新羅儒薩等於筑紫大郡
	四年三月	饗金風那等於筑紫
	四年八月	新羅高麗二国調使、饗於筑紫
	六年二月	饗多禰嶋人等於飛鳥寺西槻下
	六年夏四月	送使珍那等、饗于筑紫
	九年夏四月	饗新羅使人項那等於筑紫
	十年夏四月	饗高麗客卯問等於筑紫
	十年六月	饗新羅客若弼於筑紫
	十年九月	饗多禰嶋人等于飛鳥寺西河辺
十一年春正月	饗金忠平於筑紫	

	十一年秋七月	饗隼人等於明日香寺之西
	十一年八月	饗高麗客於筑紫
	十三年二月	饗金主山於筑紫
	十四年三月	饗金物儒於筑紫
	朱鳥元年五月	饗金智祥等於筑紫
卷 30 持統 (4)	二年二月	饗霜林等於筑紫館
	二年九月	饗耽羅佐平加羅等於筑紫館
	二年十二月	饗蝦夷男女二百一十三人於飛鳥寺西槻下
	六年冬十一月	饗祿新羅朴憶德於難波館
合計 (39)		

表 2 百済の戦役帰還者一覧表

No.	姓名	出身地	文献
1	沙門道久		『日本書紀』 天智十年十一月
2	筑紫君薩野馬	筑紫	
3	韓嶋勝娑婆	豊前国宇佐郡辛島郷	
4	布師首磐		
5	猪使連子首		『日本書紀』 天武十三年十二月
6	筑紫三宅連得許	筑紫三家連の祖	
7	大伴部博麻	筑後國上陽咩郡	『日本書紀』 持統四年十月
8	土師連富杼		
9	氷連老		
※2	筑紫君薩夜麻	筑紫 (No.2 と同じ)	
10	弓削連元寶兒		
11	物部薬	伊豫國風速郡	『日本書紀』 持統十年夏四月
12	壬生諸石	肥後國皮石郡	
13	錦部刀良	讃岐國那賀郡	『続日本紀』 慶雲四年五月
14	生王五百足	陸奥國信太郡	
15	許勢部形見	筑後國山門郡	
16	大領の先祖	備後国三谷郡	『日本靈異記』七話 『日本靈異記』十七話
17	大領先祖越智直ら八人	伊予国越智郡	
18	神部直根マロ (門 <small>のなか</small> 牛)	但馬国朝来郡	『粟鹿大明神元記』
19	多勝美麿	相模国津久井県	『新編相模国風土記稿』